That's Wrestler
レスラー列伝

浜口京子

Kyoko Hamaguchi　1978(昭和53)年生まれ　東京都台東区出身

1997年7月12日　浜口京子が世界選手権初優勝

レスリングが朝刊スポーツ4紙の1面を奪取した日！

文＝樋口郁夫（日本レスリング協会広報委員）

選手の活躍が新聞の1面を飾ることは、その競技のステータスのひとつと言っていい。それがすべてではないが、世間から注目され、多くの人から賞賛されることで、その価値は2倍、3倍となる。

レスリングはオリンピックで金メダルを量産してきたものの、人気という点では劣っており、長い間、その"栄誉"を手にすることはなかった（もっとも1980年頃までは、アマチュアスポーツが1面を飾ること自体、ほとんどなかったが…）。

最近でこそ吉田沙保里選手がらみでレスリングがスポーツ新聞の1面で扱われることも出てきたが、レスリングがスポーツ新聞の1面を飾ったのは、1988年ソウル・オリンピックで宮原厚次選手が金メダルを逃した時のスポーツ報知が最初だったように記憶する。

では、オリンピック以外でレスリングがスポーツ新聞の1面を飾った最初の出来事は？　これは、1997年世界女子選手権（フランス・クレルモンフェラン）で浜口京子選手が優勝した時だ。世界V5をしていた中国選手を破っての優勝。それだけなら、ちょっとした話題で終わっていたかもしれないが、父・アニマル浜口さんが優勝後にマット上でまな娘を肩車。その写真をAP電が全世界に配信したことで、日本の朝刊スポーツ新聞4紙（日刊スポーツ、スポーツ報知、サンケイスポーツ、デイリースポーツ）が1面に使って大きく報じた。

7月でプロ野球の巨人戦があったにもかかわらずである。当時はまだスポーツ紙もテレビも巨人戦でもっていた時代だった。その巨人戦をさしおいての"1面奪取"。

メジャースポーツへの道を歩み始めた！

NHKもこの写真を使用し、ニュースで浜口選手の快挙を報じた。その時、筆者はこの大会の取材でフランスにいたので、民放がどう扱ったは分からないが、パリで見たNHKの国際衛星放送のニュースでこの快挙が報じられ、「NHKが取り

上げたの?」と、びっくりしたことを覚えている。

間違いなくレスリングがメジャースポーツへの道を歩み始めた出来事だった。惜しかったのは、その日が休刊日であり、一般紙は夕刊での報道だったこと。扱いがやや小さかった(注=報じたスポーツ紙は、すべて駅売りの新聞)。もし普通の日なら、一般紙もこの写真を1面の左端あたりに使ったのではないかと思う。父が年頃の娘を肩車して快挙を祝う―。親子の断絶も珍しくない時代に、こんな父子愛はそう簡単に見られるものではない。

この1枚の写真によって、アニマル父子はマスコミから引っ張りだことなり、レスリングの存在を世間にアピールすることとなった。その経済効果は何億円もの広告代に匹敵する。

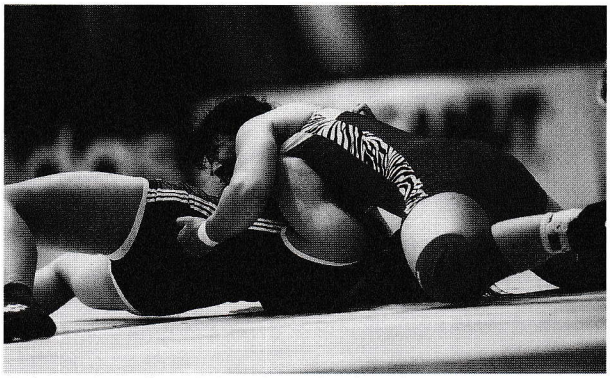
アニマル浜口さんを高く評価していた福田富昭会長

過去にこれほどまでレスリングの存在を世間にアピールできたことはなかった。女子レスリングのリーダー、日本の面目躍如といった出来事だったと思う。

元をただせば、福田富昭会長(当時は常務理事)がアニマル浜口さんを高く評価し、世界選手権の日本代表選手団に特別コーチという肩書きで入れたことが発端だった。これは福田会長でなければできない英断だろう。

今はレスリング界にプロレスに対する偏見はなくなったが、かつて両者の間にはかなり大きな溝があった。年配の人ほど、その傾向は強かった。筆者の耳に「プロレスラーがレスリングを教えられるのか」という声が入って来たし、日本代表選手団のコーチにレスリング経験のないプロレスラーを入れるということなど信じられないことだった。しかし、これが女子レスリングのメジャー化に大きな転機となった。

手前みそになるが、アニマル浜口さんの肩車には筆者も大きくかかわっている。筆者はレスリングのメジャー化を目指して脱サラし、「アマレスは21世紀のメジャースポーツだ!」と



準決勝で世界5連覇、難攻不落の劉東風(中国)をフォールで下した浜口京子

最大の敵を倒し、父・アニマル浜口コーチと赤石光生コーチと握手。初優勝の期待が高まった

いうキャッチフレーズのもとにレスリングの普及と発展に力を注いだと自負している。

その行動が、ほんのわずかでも報われたと思った時だった。その時の状況を描写させていただきたいと思う。

準決勝で難攻不落の劉東風にフォール勝ちの浜口

1997年の世界選手権の取材にフランスへ行ったのは、当時「ワールド格闘技」の記者だった筆者と矢吹建夫カメラマン、そして日本レスリング協会のスポンサーである東京スポーツ新聞の高木圭介記者(神奈川大レスリング部OB)と桑田カメラマンの2社4人だった。

正直なところ、この大会で浜口京子選手が優勝できるとは思っていなかった。75kg級には世界選手権を5度優勝した劉東風(中国)がいて、ずば抜けた実力を持っていた。浜口選手には大変失礼な話だが、「メダルはいくかもしれないが、優勝はどうかな…」というのが、その時の気持ちだった。

ところが浜口選手は準決勝でその劉東風をフォールで下して決勝進出。この段階で、私と高木記者は優勝を確信した。

ならば、インパクトのある優勝シーンをどうつくり出すか。筆者と高木記者とは、マット上でアニマル浜口さんに肩車をさせようということで意見が一致した。高木記者はセンセーショナルな記事づくりで定評のある東京スポーツのプロレス記者だ。こうした話には大乗り気だった。

優勝した選手をマット上でコーチが肩車するというのは、日本レスリング界の伝統ともいえるパフォーマンスだ。1984年ロサンゼルス・オリンピックでは、優勝した富山英明選手(現常務理事)を福田富昭監督が肩車した。1988年ソウル・オリンピックでは、優勝した小林孝至選手を富山英明コーチが肩車した。筆者も高木記者もそのシーンが脳裏に焼き付いている。

肩車のリクエストに難色を示したアニマル浜口さん

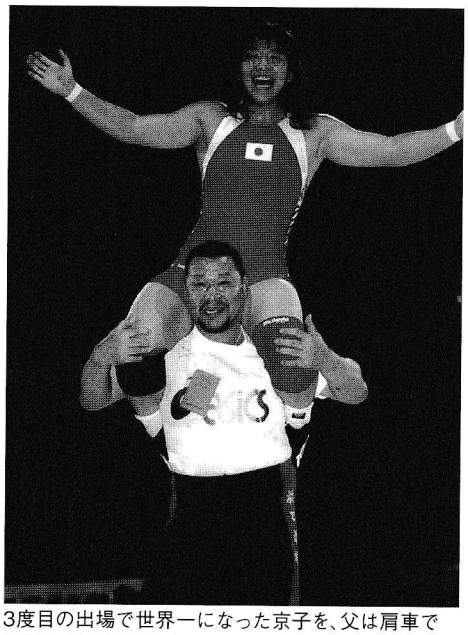
私たちはアニマル浜口さんにそれを懇願した。ところが、アニマル浜口さんがこの申し出に難色を示した。元プロレスラーだけにパフォーマンスはお手のものと思っていたが、アマチュアのマットはプロレスとは違うと思ったのだろうか。偏見の目で見られることの多かったプロレス界にいただけに、アマチュアスポーツの世界では万が一にもひんしゅくを買うような行動はできない、という気持ちが強かったようだ。

「優勝をかけて闘う勝負を前にして、何を言っているんだ」という気持ちだったのかもしれない。「日本レスリング界の伝統だ」と説明しても、首をたてに振ってくれない。

そうこうするうちに決勝の時間となった。筆者の心には、「優勝すれば浜口選手がセコンドのアニマルさんに駆け寄り、抱きついて喜びを表すだろう。それだけでも絵になるか」くらいの気持ちがあった。

そしてクリスティ・ステーングレーン（米国）との決勝戦。筆者は一眼レフカメラを持ってマットサイドの日本陣営のところにいた。世界選手権といっても、当時の女子は取材エリアなどの厳密な区別はなく、セコンドのすぐそばでカメラを構えることができた（「ワールド格闘技」の矢吹カメラマンは反対側にある正規のカメラマンエリアにいた）。

試合は浜口選手がやや慎重になり、圧勝とはいかなかったが、5分間闘って判定勝ちし、初優勝を飾った。「さあ、父に抱きついてこい！」。そんな筆者の気持ちとは裏腹に、浜口選手はマット中央でホッとした表情を浮かべて座り込み、父の方を振り向きもしない。セコンドの父は「よくやった」と言って拍手を送っているだけ。私と高木記者のつくった青写真が音を立てて崩れ落ちていくようだった。


3度目の出場で世界一になった京子を、父は肩車で祝福し、喜びを表した

表彰式、左は決勝を闘ったクリスティ・ステーングレーン（米国）、右は世界V5の劉東風（中国）

大会後のパーティーで初優勝の感激に浸る浜口京子

何の変哲もない優勝シーンが、一転して…

「このままでは何の変哲もない優勝シーンになってしまう」。そう思った筆者は、アニマル浜口さんに「肩車いってください！」と声をかけた。筆者としては、浜口選手が勝ち名乗りを受け、レスリングで義務づけられている相手選手と相手セコンドとの握手を終え、自軍コーナーに戻ってきてから肩車をしてくれ、という意味で言ったつもりだ。

富山英明選手を肩車した福田会長も、小林孝至選手を肩車した富山コーチも、相手陣営への握手を終え、すべてが終わったあとの肩車だった。

ところが、プロレス畑を歩んできたアニマル浜口さんには、そこまでの考えが及ばなかったようだ。というか、アドレナリンが最高に出ていた時だけに、私の言葉は「今行ってくれ！」というふうに受け取られて当然だった。

アニマル浜口さんは、試合前はあれほどパフォーマンスを拒んでいたにもかかわらず、筆者の言葉を聞くやいなやマット上のまな娘に向かって走り出した。筆者は「あらら、もう行っちゃったの？」と思いながら、その背中を見つめた。

マットに上がり、プロレスラー魂が爆発！

レフェリーが浜口選手の手を上げ終わった時、アニマル浜口さんが浜口選手のもとにたどり着き、相手への握手に行かせる前に肩車を試みた。浜口選手は父が何をしたいのか分からず、一瞬、ぽかーんとした表情を浮かべた。「肩車だ！」。父の言葉でやっとその行動を理解し、父の首にまたがった。

このあとは、さすがに多くの観客を相手に闘っていたプロレスラーだった。観客席へ向かってガッツポーズと勝利の雄たけび。観客を沸かせる術を知っているだけに、そのパフォーマンスに観客も熱い声援で呼応。それがアニマル浜口さん

のプロレスラー魂に火をつけ、パフォーマンスがとまらない。

浜口選手もプロレスラーの遺伝子が流れている。満面の笑みを浮かべて勝利をアピール。しばらくすると、会場にはYMCAの音楽が流れた。この大会で、試合前や試合前などに幾度となく流れていた音楽。大会の最後の試合だったこともあり、この盛り上がりにスタッフが気をきかせてくれて演出してくれたようだ。

この肩車のシーンがAP通信のカメラマンのカメラに収められ、全世界に流れたのだった。

もっとも、これだけでは新聞社も1面を飾る記事をつくるのは難しかっただろう。役に立ったのが共同通信から流れた記事だ。筆者は「ワールド格闘技」の取材で現地へ行ったものの、全日本女子レスリング連盟の広報として記録を日本に伝える役目もあったので、共同通信と時事通信に記録を送信。当時はメールなどなく、ホテルのフロントからファックスで送った。

決め手は世界の2大通信社、APと共同の配信

さらに、筆者の古巣の共同通信には浜口選手のコメントをつけて簡単な記事を送った。「ボツになってもいいや」くらいの気持ちだった。

後で分かったことだが、20行くらいの短い記事が出ており、浜口選手のコメントとして、「相手の息が上がっていた。勝てると思った」「涙って、うれしすぎる時には出ないものなんですね」の2つが使われていた。

スポーツ新聞からすれば、現地からの情報がこれだけでもあれば十分だ。日本に残っていた母・初枝さんやこれまでの取材の蓄積を使って1面をつくることはお手のもの。

もし共同通信からのコメントがなかったらどうだったか?

締め切りまで十分にある時間帯だったので、国際電話でアニマル浜口さんを取材したかもしれない。しかし、宿舎は学生寮だったので、ホテルのフロントのように取り次ぎなどできない。電話で浜口さんを探し出すことは不可能だったと思う(当時、海外で使える携帯電話はなかった)。

それにしても…。よく4紙がそろいもそろって1面で使ったものだ。ある人から「スポーツ新聞って、どんな記事で1面をつくるか、話し合っているのですか?」と聞かれたが、そんなわけはない。

他紙と違う記事で特色を出そうとしているのであり、他紙が何で1面を作っているかは、「開けてみてのお楽しみ」だ。この時は、他の3紙も同じネタで1面が作られていたことに、ちょっぴり驚いたのではないだろうか。

日曜日のため独占スクープを逃した東京スポーツ

その割をくったのが、父による娘の肩車の考案者の一人の東京スポーツ・高木記者だ。試合終了は日本の日曜日の早朝。東京スポーツの発行が休みの日だった。月曜日の朝刊スポーツ紙5紙がでかでかと報じたものを、月曜の夕刊で同じよう

曜日の関係で肩車のスクープを逃した東京スポーツは、パリのエッフェル塔前での写真をトップ面で使った

帰国した浜口親子には報道陣が殺到。成田空港で、1面で扱われた新聞を見せられ、驚きの表情を浮かべた

に報じるわけにはいかない。

苦肉の策だと思うが、東京スポーツは優勝から一夜明け、パリに移動した父娘をエッフェル塔の前に連れていき、アニマル浜口さんが浜口選手を抱いて優勝を喜ぶシーンの写真を1面に使って他紙とは違う特色を出す努力をしていた。しかし朝刊紙のインパクトに及ばなかったことはいうまでもない。

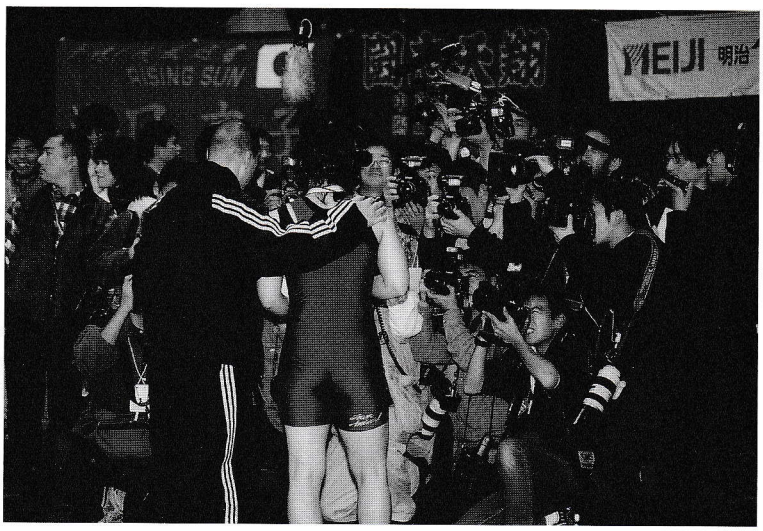
その日が日曜日でなかったらどうだっただろうか。間違いなく当日の夕刊発行の東京スポーツが1面で大きくこのニュースを扱ったことだろう。父が娘を肩車するという写真は、デスクならトップに持ってきたくなる写真だ。まして「プロレスの東京スポーツ」であり、独占スクープになるのだから。

その場合、翌日の朝刊スポーツは二番煎じになるので、1面でこのニュースを扱うことはなかったはずである。そうなると、父娘愛がここまで世間にアピールできたかどうか…。東京スポーツ1紙の独占スクープと朝刊スポーツ4紙の1面掲載では、後者の方が大きなインパクトであることは言うまでもない。

記者とカメラマンを現地に派遣した東京スポーツ、特に、いかにしてセンセーショナルに仕立てようかと考えてくれた高木記者には大変申し訳なかったが、あの日が現地の土曜日だったことが、浜口親子の知名度のアップと女子レスリングのメジャー化の大きな転機となったのである。

浜口京子選手の運の強さなのか、それともアニマル浜口さんの若い頃の筆舌に尽くせない苦労に対する天の配剤だったのだろうか…。

いずれにせよ、福田会長が当時のレスリング界のトップにしては珍しくプロレスラーを高く評価していたことが、女子レスリングをメジャースポーツへの道に歩ませた。これでオリンピック種目入りへ向けての気運が一気に高まった。

その一端に筆者も貢献できた。レスリングに携わる者として、最高に幸せを感じた出来事として、忘れえぬ思い出である。

“父と娘の肩車”以来、どの会場でも報道陣が2人に殺到。女子レスリングの存在が一気に世間に広まった